

授業内外の学習を接続する絵本作成

—保育の心理学での実践を参照しながら—

野中陽一朗（高知大学教育学部）

Development of the picture book connecting in-class learning and out-of class learning: Referring to practice in psychology of childcare

Yoichiro Nonaka (Faculty of Education, Kochi University)

要 約

本研究では、保育の心理学を受講する学生を深い学びに導くことを目指し、授業内外の学習を接続するための一方策すなわち大学の授業改善に寄与する取り組みとして、絵本作成を通じた探索的な実践を行った。本研究では、本実践の対象となった保育の心理学の授業構成を授業内外の学習の観点を踏まえて明確化した。また、保育の心理学に基づく授業内外の学習を接続するための実践を行った。その結果、保育の心理学を受講した学生が授業外学習で作成した絵本の特徴、学生が絵本作成で苦労した内容を明らかにした。そして、受講生が作成した絵本の読み聞かせから導き出した読み聞かせスキルの視点を明らかにした。以上の結果を踏まえ、今後の保育の心理学に基づく授業内外の学習及び学習支援の方向性に関する考察を行った。

キーワード：絵本、保育の心理学、授業外学習、大学の授業改善、幼児教育

I 問題と目的

大学は、最高学府とされ、高等教育機関の1つである。学士課程の一層の質保証に伴い、大学教育の質的転換が叫ばれるようになって久しい。こうしたことを背景として、授業改革の組織的な改善が、多くの大学において行われている。大学での学びとは、いったい何であるのだろうか。また、大学生は、大学教育を通してどのような能力を育成することが出来ると考えているのだろうか。金子（2012）は、大学における学生の成長を専門的知識・能力、汎用能力、自己認識という3つの次元から捉え、授業形態、副次的学習、学習行動、学習意欲・動機、生活属性が及ぼす影響を検証している。その結果、学生の成長に影響を及ぼす要因としては、大学生の学習意欲・動機が総体的に重要であるものの、授業形態も重要な要因であることが明らかにされている。この知見に基づけば、学びの主体者である大学生の動機だけでなく、授業形態にも注目していく必要があるだろう。すなわち、大学教育に携わる者は、大学教育における授業形態にも創意工夫や改善を行いつつ、大学生を深い学びに導いていかねばならない。

安永（2009）は、協同学習の枠組みから、大学の授業改善に寄与する実践報告や実践研究の知見を整理しつつ、協同学習に基づく大学の授業づくりに必要となる観点として、理論に基づく授業実践や授業方法の体系化などがあることを示している。このような研究知見は、授業実践を検討する上での1つの指針となる可能性がある。しかし、各大学で開講される全ての授業は、それぞれの専門性に基づいており、全ての授業に対して、万能な方法があるわけではない。更に、授業形態や学習方法、学習支援体制などは、大学の教育目的や所属する学生の実態に応じて創意工夫されることが求められる。そのため、大学教育に今後携わっていく者には、自身の専門性を突き詰めることと

並行して、机上の空論、絵に描いた餅と揶揄されたりすることのないよう、日々の授業実践を単純に繰り返したりするのではなく、実際に授業実践を改善していくことも必要となるだろう。こうした1人1人の大学教育に携わる者の取り組みこそが、実際の大学教育全体の改善に寄与するものになると考えられる。

また、各大学では、所属学生に対する授業内学習の工夫だけでなく、授業外学習への支援についても様々な方策を検討している。この背景には、授業内学習は内容及び時間双方が担保されているものの、大学生の授業外学習時間は極めて少ないことが関係している (e.g., 鈴木・安岡, 2007)。このような授業外学習への着目は、海外においても同様なものであるが、Krause (2007) は、授業外学習での大学生の学びに関する話題を検討し、大学生が他の大学生と授業の課題について話し合う割合が学びに関する話題の中では最も高いことを明らかにしている。この知見は、授業内学習での内容が受講生の授業外学習と連動していることを示唆している。それでは、大学生は、授業内外を介した学びを展開していく上でどのような支援を求めているのだろうか。この学びの支援方策の1つとして、大学における学習支援環境に注目が集まっている。特に注目を集めているのは、ラーニングコモンズと呼ばれる学習支援施設である。ラーニングコモンズには、大学生が個人やグループで学習できる多様な設備や物的・人的サービスを備えたいくつかのエリアが設けられている。日本では、欧米諸国に端を発するラーニングコモンズについて、支援内容の実態 (e.g., 上田・長谷川, 2008)、定点観測を通じた利用実態 (e.g., 野中・横山・中間・宮元・丸毛・山中・古川, 2014) 等が検討されている。しかし、ラーニングコモンズにおける学習支援を向上させていくためには、大学生がどのような学びを行っているのかを把握していかねばならない。この視点に立脚するならば、大学生の学びをどのように捉えるかが重要となるだろう。

大学生の学びを捉える視点として、単位取得に関する学びは代表的な視点の1つであり、授業時間とその前後に伴う予習及び復習を総括した学修には必要な時間数が定められている。すなわち、大学生の学びは、授業を中心として授業内外の学習の観点から捉えることも可能である。畑野・溝上 (2013) は、大学生の学習を態度と時間の2側面から捉え、主体的な学習態度と授業内学習時間、授業外学習時間、自主学習時間とに正の相関がみられること、また、授業内学習時間と授業外学習時間とに正の相関がみられることを明らかにしている。この知見から、大学生の学びは、授業内学習における内容を基軸として、授業内外の学習をより結びつけていくことも可能になるだろう。それでは、大学教育に携わる者は、授業内外の学習を結びつけていくためにどのような取り組みができるかを検討する必要がある。

著者の所属する高知大学教育学部は、2015年度の入学生以降、学校教育教員養成に特化した学部となった。また、2015年度より幼稚園教諭一種免許状と保育士資格を取得できる幼児教育コースが設けられた。この幼児教育コースは、高知県ではじめての4年制の保育者養成教育機関である。すなわち、世界的にも注目が集まる幼児教育において、高度な人材を養成しようとしていることがうかがえる。一方、2011年度以降、保育士養成課程の改正に伴い、保育に携わる教育機関のカリキュラム全体に大きな変容が生じた。そのような中、青山 (2011) は、保育士養成課程の改正内容を包括的に整理し、「保育者論」を注目すべき科目の1つとして取り上げ、保育者養成機関20校が公開している「保育者論」のシラバスを対象に内容分析を行った。その結果、「保育者論」の開講年次、授業形態、授業目標や授業内容を明らかにしている。更に、シラバスの内容分析を踏まえ、実際に授業形式、授業の概要、15回の授業計画や評価方法などから構成されるオリジナルの「保育者論」シラバスを作成し提示している。一方、大野木 (2012) は、2011年度入学生から適用される保育士養成課程の改正に伴い新設の「保育の心理学Ⅰ」及び「保育の心理学Ⅱ」に関する科目上の位置づけ、保育士試験の出題範囲を整理しつつ、「保育の心理学Ⅰ」で使用するテキストを作成している。

そして、当該テキストに基づく授業実践を進め、受講生と授業担当者の2側面による評価を通した内容の妥当性及び学修効果の検討を行っている。その結果、授業評価アンケートを構成する15項目中14項目は平均評定値が中央値を上回るものの、予習や復習をして授業に臨むことに関する項目のみ評定が中央値を下回っていた。一方、授業担当者は、授業実践を行った対象受講生を取り巻くカリキュラム編成全体の問題を踏まえながら90分15回でテキスト全体を解説することが困難であることを指摘している。青山(2011)や大野木(2012)は、自身の担当科目を保育士資格取得に必要な科目の中でどのような位置づけにあるのかを俯瞰的に捉え、自身の授業実践に関連する報告を行っている。こうした取り組みは、同一科目を今後担当する者にとって有益な知見となるだろう。

著者は、幼児教育コースを対象に開講される「保育の心理学」¹を担当している。保育士養成課程等検討会(2010)は、「保育の心理学」新設の理由として、保育との関連で子どもの発達の過程や学びの過程について学ぶことが重要であること、「保育の心理学Ⅱ(演習科目)」では観察等を通じて子どもの心身の状態や行動等を把握する技術を高め、子ども理解に基づく適切な発達援助を行う実践力を修得できるようにするためといったことを示している。そのため、比較的新しい科目である「保育の心理学」での実践を踏まえ、授業内外の学習を結びつける視座を探索的に検討していくことは、保育の心理学を今後展開していく上でも重要な取り組みになると考えられる。

それでは、子ども理解に基づく適切な発達援助を考える上で、どのような視点を保育の心理学の中に取り入れることができるだろうか。幼児期に会う「おもちゃ」²あるいは「絵本」は、幼児のその後の発達や学びに大きな影響を及ぼすことが予測される。淡野・内田(2015)は、保育所保育指針及び保育所保育指針解説書、幼稚園教育要領及び幼稚園教育要領解説、中学校学習指導要領及び中学校学習指導要領解説(技術・家庭編)、高等学校学習指導要領解説(家庭編)の中で絵本に言及されている部分を丹念に整理している。また、絵本の位置づけを俯瞰的に捉えた上で、担当する大学院授業³及び学部授業⁴の双方で展開された絵本作成の活動、完成した絵本の内容等を報告している。そして、学部授業の受講生に対しては作成した絵本を用いて実際の幼児を対象に読み聞かせの演習を行うとともに、絵本の読み聞かせ時に見出された幼児の反応の違いを推察している。この取り組みでは、絵本作成自体を授業内学習に位置づけている。しかし、授業内学習では、担当教員と受講生とが相互交流を通してその場でしかできない学びを充実させていく必要がある。そのため、授業外学習に絵本作成を設定することはできないだろうか。授業外学習の一部をあえて絵本作成の時間とすることを求めるならば、絵本作成に基づき授業内外の学習を接続させることは可能のように考えられる。

以上のことから、本研究では、保育の心理学を受講する学生を深い学びに導くことを目指し、授業内外の学習を接続するための一方策すなわち大学の授業改善に寄与する取り組みとして、絵本作成を通した探索的な実践を行うことを目的とする。

Ⅱ 方法

1. 保育の心理学受講生⁵

高知大学教育学部幼児教育コース所属であり平成28年度1学期に開講された保育の心理学を受講した12名であった。

2. 保育の心理学の授業構成⁶

本授業構成は、まず毎回レジュメとコメントシート⁷を配付する。次に、導入課題を終えた後、前回のコメントシートに対するフィードバックを行う。その後、個人及びグループでの課題学習、模擬保育を通した演習を行いつつ、授業を展開していくというものであった。授業の最後には、コメントシートの最後の質問項目への回答を求めた。授業内容は、保育実践の現実に即しつつ、乳幼

児の心身の発達及び学習過程に関する心理学の諸理論、研究方法や研究成果をわかりやすく解説する。また、日常生活や遊びを通した子どもの発達や学習過程を心理学的視点から包括的に検討し、効果的な学習や発達を支援するための認知的、社会的、文化的環境はどのようなものかについて議論を進める。そして、受講生は、心理学の枠組みを活用して乳幼児の教育・学習を語ること、かつ乳幼児の発達支援に心理学的に寄与する「おもちゃ」あるいは「絵本」を作成することを目指すというものであった。成績評価は、授業での議論及び発表（30%）、作成課題の内容（40%）、学期末のレポート課題（30%）に基づき絶対評価を行うというものであった。

3. 絵本作成課題と授業内外の学習⁸

絵本作成課題は、工作キットによる「白無地絵本（A4判）」⁹を作成材料とすること、作成する絵本は、「幼児の好奇心を育む絵本」にするという制約以外は、ストーリー等の構成は自由とした。

第1回目の授業では、授業の全体概要を踏まえ、授業外学習として「おもちゃ」あるいは「絵本」を作成してもらう課題を出す旨を教示した。また、当該課題は、成績評価にも該当すること、作成する内容は自由意志で決定して良いことを併せて説明し、受講生に考える時間及び周囲と相談する時間を設け、各自回答を求めた。その結果、全員が絵本を選択した。その次に、2回目の授業のコメントシートの設問の1つには、「好きな絵本」を受講生から尋ねる内容を設けた。そして、なぜその絵本が好きなのか、絵本の魅力を紹介しあう活動を行った。3回目の授業以降は、授業の冒頭で著者が持ってきた絵本を受講生の中の1人が保育士役、他の受講生が幼児役を演じ、模擬場面での絵本の読み聞かせ活動の演習を行った¹⁰。その結果、受講生全員が1回は保育士役で絵本の読み聞かせ活動を実施することが出来た。

絵本作成課題に関しては、受講生全員が授業内学習の中で1度自身の構想を全体の前で発表する機会を設けた。その後、実際に絵本作成に従事し、作成した絵本は、全員の前で読み聞かせを受講生全員が行える演習の機会を設けた。また、読み聞かせの終了時には、自己評価だけでなく、他者からポジティブフィードバックが受けられるようにした。そして最後の時点で、絵本作成及び読み聞かせの実践に関するいくつかの質問項目から構成されるアンケート¹¹への回答を求めた。

Ⅲ 結果と考察

1. 作成された絵本の特徴

Table 1には、作成された絵本毎に題目と主要キャラクターの属性を整理したものを記載した。

Table 1 作成された絵本

| 発表者 No | 作成絵本 題名 | 主要キャラクター の属性 |
|-----------|--------------|-----------------|
| 1 | あかいふうせん | 玩具（風船） |
| 2 | たべられるかな | 人間とお化け |
| 3 | 雨と源太とカッパと長ぐつ | 人間と動物 |
| 4 | ともだち | 動物 |
| 5 | へびくん | 動物 |
| 6 | このどうぶつなあんだ？ | 動物 |
| 7 | ありのおうち | 動物 |
| 8 | あかずきん | 人間と動物 |
| 9 | ちっほけなゆうき | 動物 |
| 10 | はみがきできるかな | 動物 |
| 11 | あめのひ | 人間 |
| 12 | なかよしたんけんたい | 動物 |

一方、12作の絵本の詳細は、表紙と裏表紙をAppendixに掲載した。作成された12作の絵本の中

では、2作を除き、人間以外の動物あるいはお化けが擬人化して登場していた。このような絵本におけるキャラクターを擬人化する傾向は、本研究だけでなく、淡野・内田（2015）でも見出されていた。なぜ、保育の心理学の受講生は、絵本を作成する上で主要キャラクターを擬人化して描いたのだろうか。今後、この点は、より詳細に検討していくと同時に、キャラクターを動物やお化けから人間に置き換えた場合に読み手である幼児に及ぼす効果が異なるかを検討していくことも求められるだろう。また、題目は、12作の絵本の中では、1作を除き、全て平仮名で作成されていた。これは幼児の発達段階に沿った対応であるように考えられる。

2. 絵本作成で苦勞した内容

絵本作成で苦勞した内容としては、「色を塗る部分（4名）」、「絵を隠す部分」、「ひまわりを出来るだけ多く描く部分」、「絵」といった絵に関するものをあげた受講生が総計で7名存在した。このことから、本研究の受講生は、半数以上が絵及び絵に付随することを苦勞した内容であったと考えていたことが明らかになった。そのため、絵を描くとことの難しさが関係すると同時に、何かしらの専門的な支援が必要だったことを物語っている。一方、4名は、文言は異なるものの、概して物語をどのように展開するかという部分を苦勞した内容としてあげていた。すなわち、絵本を構成する「絵」あるいは「物語」のいずれかで苦勞していた受講生が大部分を占めていたことが明らかにされた。今後は、受講生が作成した絵本を絵の専門家の視点、あるいは物語の専門家の視点から支援可能な体制を築くと同時に、受講生が作成する絵本には様々な専門家の視点から検討した場合、どのような改善すべき観点が見出せるのかを具現化していくことも必要となるかもしれない。なお、「題目」を苦勞した内容としてあげた受講生も1名いた。この結果は、最初に目に入る対象を基軸に幼児に興味を抱かせようと考えたことに起因するのではないかと考えられる。

3. 読み聞かせスキルの視点

受講生自身が自分で作成した絵本を読み聞かせの材料として演習を行った結果、大多数の受講生が主要キャラクターのセリフやナレーション、抑揚といった「読み方」についてスキルを高めたいと考えていることが示された。なお、松村・森・宇陀（2015）は、絵本の読み聞かせ時の登場人物の演じ分けが物語理解度や物語の印象に及ぼす影響を検討し、大きさに演じ分ける場合と統制群とでは物語理解度に差はみられないこと、登場人物の心情に関しては統制群の方が高い評定を行うことを明らかにした。このことは、読み聞かせ表現方法において登場人物を演じることが必ずしも良いわけではないこと示唆している。そこで、受講生が自らのスキルを育む視点を提示した際、こうした研究知見を紹介することで、エビデンスに基づき実践を見つめなおすことが出来る契機を与えることができるようになるのではないだろうか。一方、読み聞かせ時に幼児との関係性をどう築きながら読むべきかという人間関係に焦点を置いた回答も見られた。今後は、演習を通じて各受講生が見出した課題を解決できるようなフィードバックあるいは更には授業外学習での取り組むべき視点などを提供していくことも求められるかもしれない。

IV 総合的考察

まず、授業外学習の視点から考察する。淡野・内田（2015）と異なり、本研究では授業外学習として絵本作成課題を実施したが、受講生は十分に遂行できた。その結果、授業内外の学習を接続し、授業内学習では、絵本作成に時間を割かれず、受講生自身が作成した絵本を材料に演習形式の授業展開をもたらすことが出来た。しかし、絵本作成課題が、講義の評価対象の一部であったために熱心に取り組んだ可能性も生じる。村山（2006）は、学習者がテスト作成者の評価基準や意図を推

察し自身の学習行動を変容させる現象として「テストへの適応」という構成概念があることを提唱している。この視点に立脚すれば、評価の対象であるからこそ絵本作成課題に真摯に取り組んだ可能性も否めない。森（2015）は、教育目標、教育方法、教育評価は、三位一体で成立するべきであることを指摘している。そのため、授業外学習課題を教育評価の1側面として設定する場合、授業外学習課題に対する受講生の認識を踏まえつつ教育目標、教育方法のあり方を検討していく必要も考えられよう。

受講生の作成した絵本は、擬人化した主要キャラクターが多かった。今後は、受講生がどういう意図からキャラクターを設定したのか、作成プロセスを丹念に見取ることも重要と考えられる。また、絵本作成や読み聞かせを行う際に生起する課題を支援するための枠組みを大学教育に携わる者は検討していく必要もあるだろう。他方、本研究の対象とした授業外学習は、授業に関係するものであった。しかし、受講生の学びに対する主体性を判断基準の1つと捉えるならば、授業内外の学習時間だけでなく、授業とは関係のない学びであり真に主体的に取り組む時間となる自主的な学習時間に対して注目していくことも重要である。野中（印刷中）は、畑野・溝上（2013）の枠組みにおける「学習の量」の概念を大学生自身の自主的な学習時間を踏まえたものにまで拡張し、授業における主体的な学習態度という「学習の質」と学習時間という「学習の量」の両側面から捉えた大学生の学習タイプを類型化し、大学生の学習タイプによってラーニングコモンズを中心とした学習支援内容に対する評価に差異が生じることを明らかにしている。そのため、今後は、授業内外の学びに加え、自主的な学習の視点も踏まえつつ、受講生のタイプに応じた学習支援体制を検討していくことも求められるだろう。

本研究では、授業内外の学習を接続するという探索的な目的を鑑み、絵本作成という実践を重視し、著者が担当した保育の心理学における受講者の学びの実態の一側面を切り取ったにすぎない。今後は、各受講生の学業レベルや実際に費やした授業外学習時間も併せた検討が必要となるだろう。そして、受講生は授業内学習を手がかりとしてどのような学びを行っているのか、その際にはどのような支援が必要になるかも併せて検討していくことが求められるだろう。大学教育に携わる者は、自分自身の授業を進めながら実践的な知見を汲み上げつつ、自身の担当する授業を中心に提供可能な学習支援のあり方を構築していく必要もあるだろう。このような考察が、大学教育の改善及び幼児教育に世界的な注目が集まっている時期に行われたことにより、今後の幼児教育を担う人材養成を行っていく上で必要不可欠な幼児教育プログラムに関する議論を次なるステージに進める一助になったと考えられる。

註

- 1 著者の勤務校では、「保育の心理学」という授業科目名ではあるが、保育士資格の「保育の対象の理解に関する科目」系列の「保育の心理学Ⅱ（演習科目1単位）」に該当する。本研究では、授業科目名である「保育の心理学」という文言を使用する。
- 2 授業の1回目で「おもちゃ」と「絵本」のどちらを作りたいかを尋ねた結果、受講生全員が「絵本」を選定した。本研究では、紙幅の都合から、絵本に関する先行研究の知見を掲載している。なお、受講生がどちらを選定しても根拠を持って講義を展開できるよう事前準備を行っていた。
- 3 教育職員免許法の定める中学校教諭免許状家庭の教科に関する科目に該当している。
- 4 教育職員免許法の定める中学校教諭免許状家庭の教科又は教職に関する科目に該当している。
- 5 本受講生は、全員2年生であり、1年生時の1学期に「教育心理学概論A」を受講し終えている。なお、著者の勤務校では、「教育心理学概論A」という授業科目名ではあるが、保育士資格の「保育の対象の理解に関する科目」系列の「保育の心理学Ⅰ（講義科目2単位）」に該当する。

- 6 本研究においては、紙幅の都合から、授業構成を簡便に記載するに留めた。具体的な授業計画などは、下記のURLより閲覧することが可能である。
https://kulas.jimu.kochi-u.ac.jp/portal/Public/Syllabus/Syllabus/DetailMain.aspx?lct_year=2016&lct_cd=41158
- 7 コメントシートは、概ね5つの設問で構成され、最後の質問項目である「授業で学んだこと、疑問点、質問、改善点や要望」は毎回尋ねられた。
- 8 本稿では、授業内外の学習を絵本作成の視点からのみ記載している。
- 9 当該絵本は、本文のページ数8頁、本文とは別の表・裏表紙から構成されるものであり、色鉛筆、マーカー、絵の具などが使用できるものである。
- 10 作成した絵本の全員の読み聞かせを行う回に関しては、当該活動は行われなかった。
- 11 本研究では、作成した絵本に関する工夫、読み聞かせ実践を通して導き出した読み聞かせスキルについてのみ抜粋した報告を行う。

引用文献

- 青山佳代 (2011). 保育士養成課程において求められるカリキュラムに関する考察—新設科目「保育者論」シラバスに注目して— 金城学院大学論集人文科学編, **8**, 97-105.
- 畑野 快・溝上慎一 (2013). 大学生の主体的な授業態度と学習時間に基づく学生タイプの検討—日本教育工学会論文誌, **37**, 13-21.
- 保育士養成課程等検討会 (2010). 保育士養成課程等の改正について (中間まとめ) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課 Retrieved from <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/dl/s0324-6a.pdf> (2016年11月28日)
- 金子元久 (2012). 大学教育と学生の成長—名古屋高等教育研究, **12**, 211-236.
- Krause, K-L. (2007). Beyond classroom walls: Students' out-of-class peer experiences and implications for teaching and learning—名古屋高等教育研究, **7**, 301-319.
- 松村 敦・森 円花・宇陀則彦 (2015). 絵本の読み聞かせ時の演じ分けが子どもの物語理解と物語の印象に与える影響, 日本教育工学会論文誌, **39**(Suppl.), 125-128.
- 森 敏昭 (2015). 学習開発学の展開—学習心理学から学習科学へ— 学習開発学研究, **8**, 3-16.
- 村山 航 (2006). テストへの適応—教育実践状の問題点と解決のための視点— 教育心理学研究, **54**, 265-279.
- 野中陽一朗・横山 香・中間玲子・宮元博章・丸毛幸太郎・山中一英・古川雅文 (2014). ラーニングコモンズ導入期における学生の空間利用状況—定点観測からの探索的検討— 兵庫教育大学研究紀要, **44**, 207-218.
- 野中陽一朗 (印刷中). 大学生の学習タイプの類型化とタイプ別学習支援内容の評価—ラーニングコモンズにおける学習支援内容に着目して— 日本教育工学会論文誌, **40**(Suppl.), xx-xx.
- 大野木裕明 (2012). 「保育の心理学Ⅰ」に関する実証的研究とプログラム評価— 仁愛大学研究紀要—人間性生活学部編, **4**, 53-67.
- 鈴木鯛功・安岡高志 (2007). 単位修得に必要な学修時間についての調査—授業外学修時間を中心として— 大学教育学会誌, **29**, 159-164.
- 淡野将太・内田 裕 (2015). 保育学教育としての絵本作成— 島根大学教育臨床総合研究, **14**, 167-179.
- 上田直人・長谷川豊祐 (2008). わが国の大学図書館におけるラーニング・コモンズの事例研究—名古屋大学附属図書館研究年報, **7**, 47-62.
- 安永 悟 (2009). 協同による大学授業の改善— 教育心理学年報, **48**, 163-172.

付記

本研究は、平成28年度1学期に高知大学で開講された保育の心理学を通して実施された。また、本研究は、高知大学平成28年度「人文社会科学系長裁量経費（基礎研究補助）」の助成を受け行ったものの一部である。

謝辞

保育の心理学を受講し、授業に熱心に取り組んでくれた学生の皆様に甚深の感謝の念を表します。

Appendix 受講生の作成した絵本一覧

(黒色部分は名前を記載した受講生の実名記載を倫理的視点から避けるために加工した部分である)

